
もしも世界があと3日なら

沙華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも世界があと3日なら

【Nコード】

N8177H

【作者名】

沙華

【あらすじ】

「世界があと3日で終わるなら」…そう考えて時を過ごしたこと、あなたにはありますか？

1 コクハクノ月

もしも地球があと3日なら、
そんなふうに考えて毎日を過ごせればよかった。

もしも地球があと3日なら、
きっと私は片想いの津田に告白するだろうか。

大好きなたらこのパスタを食べ、1回くらいラッキーの散歩もする
だろう。

うざかった担任の大本にもしかしたらお礼のひと言も言ってやる
かもしれないし、
隣の席のバカな青木に、今度は消しゴムのひとつもかしてやるのか
もしれない。

いつもうるさかった親に置手紙を書いて一日一人旅に出て、大事な
ものを見つけるかもしれないし、
興味本位で書いてみたケータイ小説をどこかの出版社に送りつけた
りして。

3日じゃとても結果は返ってこないだろうけれど。

3日じゃ全然、何にもろくに、夢のようなことはできないかもしれ
ないけれど。

大好きなスタバの抹茶プラペチーノを飲むことくらいはできたりし
て。

得ることはできないかもしれないけれど、感じることはできたりして。

毎日毎日、ただ生きているから思わないだけで

実は現実もあと3日で終幕が下りるのかもしれない。

だってどんな舞台だって、終幕の前に出演者の挨拶があるわけじゃないでしょ。

幕が下りて気づく終焉に、「ああ私たちは」

「何か得ることができたのかな」って思ったりして。

「おっ芽衣！ どうしたの、今日一人？ 白屋いないね」

「…うん、ちょっと…」

だから決めた。

自分が病気、しかも難病治す方法はありません、あと生きていられるのは半年ですって

知ったからかもしれないけど、それでも私は決心したんだ。

あと半年でも、自分が、もしかしたら津田が、悲しむことになったとしても。

届く事がないとしても、叶うことがないとしても、それでも後悔するよりいいと思ったから。

なんかの偉い人が、

”人は行動を起こした後悔より行動しなかった後悔の方が数倍重く

感じる”って言ってたのを思い出す。

「津田っ」

「はい？ え、どしたの顔まっ赤……」

「わたし…ずっとね」

あと半年とか言われたら、すごい気になるようになったじゃん。

ってことはきっと、あと半年でも私は後悔したくないってこと。未練たらたらーで、成仏できないのはきつと苦しいしね。

「ずっと…前からっ」

…たぶん津田が好きなんだ。

そう言ったら、津田はどんな反応をするだろう。

そして、どんな半年を過ごすのだろう。

フラれるだろうか。

無視されるだろうか。

無視されるんだったら、フラれる方がマシだって、きっと美優は言うだろうな。

ああ、いろいろ考え過ぎかも。
顔がアツイ。

頭がくらくらしてくる。

言わなきゃって。

私が無視みたいなことになっちゃうじゃん。

そんなこと…絶対だめでしょ……。

「芽衣？…おい芽衣ッ！」

津田の顔がボヤけて消えた。

2 ホウカゴノ月（前書き）

なんか物の書き方がわかりません…
書きたい事は浮かんでるのに……

2 ホウカゴノ月

「…っていきなり倒れてさ、まったくびっくりしたっての！」

「あはは…ごめんごめん」

「でもいいじゃん！今や付き合ってたからさあ、あんたたちい！」

あの日告白して本当によかった。

あのあとわたしは倒れたらしく、津田は先生を呼んで付きっきりで傍に居てくれ、

しかも目覚めた私に津田から好きだと言ってくれた。

「芽衣が言おうとしてたこと、外れてたらごめん」

って、なんてかわいんだ、なんて思ってしまった。

津田は決して女子に人気が無い方じゃないので、付き合ってるってことは

親友の美優にしか言わないでおくことにした。津田もそれをOKしてくれた。

たったそれだけのことなのに、自分の彼氏になったんだって実感したからかもしれないけど

なんて優しいんだろう、なんてバカなことを考える。他人からしたらまったくいいのろけだろう。

「で？芽衣は平気なの？」

「うんっ 全然大丈夫！」

放課後の教室。左に大好きな美優がいて、右にはおなじく大好きな津田がいてくれる。

それだけで今の私はどんなに幸せなことか。告白してよかったと目覚めてから

保健室のベッドで何度も実感した。奇跡が起きた、この私に。

「恥ずかしくって倒れちゃったんじゃないのお？愛のコ・ク・ハ・クが」

「わっ私はまだしてなかったし！」

「津田に押し付け？告白しようとしたことは変わらないじゃーん」
♪

美優はいつも私をいじっておもしろがる。

たまに本気でいやなときもあるけど、そんなの100回に1回くらいで、いつもの美優は大好きだ。

とはいってもさすがに当の津田の前でこんな話をされるのはちょっと恥ずかしい。

いや結構恥ずかしい。

「もーいいじゃんほっというてよ！」

「ふーん？じゃ、あたしそろそろ帰るけど」

「俺もそろそろ帰らないと。芽衣は？」

「帰る帰る！おいてかないで！」

「今日ぶっ倒れた奴をおいてかねーよ」

ドア付近で美優がふっふーと楽しそうにこっちを眺めてる。
美優め、次くらいに100回に1回が来るかもしれない。

「じゃっあね〜」

「え、白屋急ぎ？」

「え、ああ、いやあ…」

「一緒に帰ろうよ。芽衣とずっと一緒に帰ってたんでしょ？」

「えー…それはさすがに…ねえ…？」

美優がちらっと困ったような目でこっちを見る。

私も内心、津田の言葉にがっくりきた。

だけど同時に喜んでる自分もいることにも気がついた。

美優があれをこれをと逃れようとしてるのに気付かないのか、津田は「なんで？」と言う顔をしている。

そうだ、美優がいてくれた方が助かる。
2人つきりなんてとてもじゃないけど恥ずかしいし…。

「もー！気づけよ津田！」

「はぁ？意味わかんないんだけど」

「いいじゃん美優、一緒に帰ろ！」

美優はびっくりしたような表情を浮かべてから、すぐに嫌そうな気だるそうな表情になった。

今日くらいは美優がいてくれたほうがいい。津田もいいよって言ってるし。てゆうか津田から誘ってるし。

そこが少し”彼女”としてはひっかかったものの、私自身美優が好きだし、

津田の美優に対する思いも私が美優に対する種類と同じ”好き”だと思ったから気にしないことにした。

美優を嫌っている津田を想像してみたら、好きでいてくれる方が全然いい。

美優は大きくなった溜息をつく、私たちに向って言った。

「今日だけだからね！津田も、芽衣はあんたの彼女なんだから！しっかり自覚しろ！」

3 トモダチの月

なんだかんだ言っても、美優は私にとっても優しい。

津田と付き合うようになって、美優と2人で過ごす時間は少し結構減ったかもしれないが、それでも美優は変わらない。

変わらず私に接してくれた。もちろん変わらず津田にも。

美優は男子に人気がある方だと思う。

恋愛対象なのかどうかは男子に直接アンケートでもとってみない限り女子である私にはわからないが、

少なくとも女友達としてはかなり人気がある。恋の相談も結構受けているみたい。

比較的男子と接点がない私が津田と友達になれたのも津田が美優の友達だったからだ。

だからもちろん、津田との歴史は美優の方がずっと深かった。

それに対してどうこう思ったりしたこともなくはなかったが、それでも私は美優に絶対的な信頼をおいていた。

「芽衣！ 帰ろーぜ」

今日だけだなんて言っていた美優も、私の泣きの願いをしぶしぶ聞いてくれて

今では3人で帰るのが主流になっている。といっても付き合っているのは秘密なので、

教室のみんなが帰るまで待って、門で待ち合わせた。

美優は本当に優しい。美優や津田といると、不思議と自然に自分が不治の病気であることも忘れた。

「うん……」

「なに？」

「…美優がさ、休むなんて珍しいよね」

「ああ…そうだな。あいつが学校休んだの見たことねーかも」

「どうしよう。」

「私はこのとき本気で思った。」

「私、美優がいないと津田と2人で帰る勇氣もないんだ……。」

「誰かにバレたらどうしよう。」

「話すネタがない。」

「そんなことばかり考えて。」

「私美優の家寄って行くね！」

「俺も行くのか？心配だし」

「ありがたいけど…女子の家だし、今日は私一人で行くよ」

「津田と別れて、校門を出てすぐに正直ほっとした。」

「美優を気にするふりをして、実は自分を守りたいだけなんて、なんていう人間だろう。」

美優と自分を比べると、直さなければと思う部分は数え切れないほどあると思う。

美優の母親に挨拶し、2階の美優の部屋に上がる。

それはいつものことだった。美優の家に行くたび、そんな順序。

美優の家に初めてあがった、小学校2年生のときからずっと続いていたこと。

美優の母ともかなり親しく、親も友達だったので簡単にあがれていた。

今日も今までのように、自分の家のようにあがれると思っていた。だけど、何故か今回は実際そうはならなかった。

「芽衣ちゃん、お母さんは知ってるの？家に…芽衣ちゃんが来てるってこと」

「え？学校帰りなんで言ってないですけど…」

「…じゃあ今お家に電話するからちよっと待っていてくれる？」

「はい…」

なんでだろう。いつもと変わらないことなのに。ずっと普通だったことなのに。

電話が終って、美優の部屋まであがらせてもらえた。木製のドアを、いつも続いていたようにノックする。

「芽衣？」

「うん。お見舞いにきた」

「入って」

美優はベッドに座っていた。意外と大丈夫そうでほんと安心した。

「美優平気？休むなんて珍しいからびっくりした」

「……ちよつと気分悪くってさ」

「え?!今も?私いて大丈夫?」

「それは別に……ってか風邪とかそういうんじゃないと思うし」

なんか、聞いちゃいけないようなかんじだった。

風邪じゃないって、ストレスとかそういう系のこと?

「あのさ、具合悪いんならわたし帰るよ……?学校休んだんだしやっぱ寝てた方が……」

「芽衣こそ学校なんて行っちゃって平気なの」

「え………」

「芽衣さあ、病気なんでしょ?あたしなんかよりずっと悪いの。」

なんで学校来てんの？やばいんでしょ？あと3年って」

「……」

「学校なんて来なければいいじゃんっ
死んじゃうような病気の人が来てていいわけ?!」

前からわかってたんでしょ！　なんでなんでもない顔してんのよ
?!」

「ご、ごめ……美優にはまだ言わなかったけどでも……」

「そんなこと言ってるんじゃない！」

「:~!」

美優怖い。隠してたから怒ってるんじゃないの……？

だって、美優が怒る理由なんてそれくらいしかない。

少なくとも私には、思いつかない。

しばらくの沈黙。美優の目に涙。

美優泣いてる……。なんで？隠してたからじゃないの……？？
わかんないよ……。

「……もーいいよ……芽衣は……なんでか全然、全部わかってないの。
友達だったんじゃないの？」

「と、友達でしょっ！　けどわかんないよ！
なんで美優怒ってるのっ？　言わなかったのはごめんね？
だけどそれしか……」

「……今日は、帰って」

しばらくの沈黙。私は泣き目で部屋を出ていく。

美優のお母さんに小さく一言あいさつして、自分の家へと。

美優があんなに怒ったのは初めてかもしれない。

あれに近く怒ったことはあっただろうけれど、あれほどまでに怒ったのは今日が初めて。

だから、今日の迫力には勝てない。

冷静にそんなことを考えていたら、涙があふれてしまった。

頬に落ちる。まだ家についていないというのに止められない。

涙が止まらない。

美優が怒ってる。

それだけで、怖いというより、胸がぎゅってなった。

切なくなった。

たぶん、私の大好きな美優が、私に怒っているからだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8177h/>

もしも世界があと3日なら

2010年10月21日21時06分発行